



残暑、お見舞い申し上げます。

OB会長からのご挨拶

土屋 正春（'77年入学）

梅雨明け宣言が出された翌日にこの原稿を書いています。ここ数日暑い日が続き、今年の夏も暑い夏になりそうな予感です。

学生ピックバンドの夏のイベントと言えば、山野ビッグバンドコンテストですが、27回の今年は8月17日、18日に日本青年館大ホールにて開かれます。ロスガラの出演は初日の5番目です。今年の出演校は40校を上回り、50校近くになっており、ますます盛んになっているようです。

私がまだ高校生だった時に、一人でこの山野ビッグバンドコンテストを見に行った覚えがあります。20年ぐらい前の話ですが、まだ当時はコンテストの形式にはなっていなかったように思います。次々と大学生のバンドがステージ上に現れて、演奏を繰り広げる様子は、当時の高校生にはなかなか刺激的でした。でも、全体にどこかほのぼのとしていて、曲もカウントベイシーのナンバーが圧倒的に多かったように記憶していません。特に、エイプリル・イン・パリスは、やたらとどのバンドでもやっていました。やっぱり、「ワン・モア・タイム！」というのが、みんなやりたかったんでしょうね。ちなみに当時の全体の司会は、いそノてるヲ氏でした。今年の総合司会は国府弘子さんですね。

私が、なぜ山野ビッグバンドコンテストに一人で出かけたかは、まったく覚えていないのですが（チケットはタダでどこかから手に入れたのだと思います。）、そんなものに行くぐらいですから、ジャズには興味があったようです。そんな高校生が大学生のビッグバンドの演奏を聴いたのですから、大学生になったらやってみたい！と思ったとしてもなんの不思議もありません。でも、高校卒業して一年ほどかかって東工大に入学した時には、まさかこの大学にそんなビッグバンドのサークルがあるとは思ってもみませんでした。ところが、それがあった訳です。ちょっと変わったバンドの名前だと思っていたながらも、すぐに入部してしまい、結局現在にいたるまでロスガラとの長い付き合いが始まりました。

今年の山野ビッグバンドコンテストでも、ロスガラらしい熱く楽しい演奏を期待しています。

ロス・ガラチェロス創部記

ロスガラチェロスの現在の発展と活躍ぶりは、部活通信誌を度々お送りいただいておりますのでよく存じております。私、一応創部者?として、何よりも喜ばしく思っております。こちらも何かメッセージを回答しようかとも思っていたのですが、創部当時とのあまりの違いは他人事のようにであり、一方私の音楽についての興味対象が変わってきており（現在はJ. S. バッハ）、私の現在の仕事（建築設計）が過去を振り返るヒマがない程面白いものですから、ついで無沙汰してしまいました。

この度、OB会より創部当時のことを語ってくれとの依頼を機に、過去の整理と、部への新たな提案を試みようと思ひ、ペンをとりました。

もとはといえば、創部といっても大した決意や理念によるものではなく、榎本さんと私が、大学の講堂脇のスロープで寝そべり空を見ながら、何か面白いことがないかなあとの話から始まりました。当時、私の興味があったのは中南米には何十種類とあるリズム音楽でした。そのリズム音楽の一つ一つを、レコード鑑賞したり手持ちの楽器で演奏したりして味わってみようではないかというのが動機でした。榎本さんのギターを基本として、わたしはボンゴ、コンガ、マラカス、ギョロ、クラベス等の打楽器をそろえ受け持つことにしました。しかしさらに複数の楽器演奏者が必要でした。私の個人的たぐらみは伏せて、皆で楽しく軽音楽を演奏しようよと、何でもいから楽器を所有し演奏できる人を募りました。クラリネット、フルート、ハワイアンギター、ベースが集まりました。そのうち後輩からトランペット、ドラムが加わりました。一体これで何を演奏するの?といった楽器編成でした。部としてはまだ未公認なので、校舎の階段踊り場下が未使用の物置となっているのを見つけて、未公認占拠し、部室と称し、活動を始めました。

私はあくまで中南米音楽をやりたかったので、中南米音楽評論家として活躍されていた谷川越二氏にわれわれの部のネーミングを依頼しました。当時、「中南米音楽」という月刊誌があり、その音楽誌主催の音楽鑑賞会に私は時々出席し、谷川氏の解説を聴いていたのです。依頼の1ヶ月

後、谷川氏からいただいたメモには「ロス・ガラチェロス」とありました。谷川氏によれば、キューバにグァラーチャという陽気なリズムを演奏する「ロス・グァラチェロス・デル・キューバ」という素晴らしいバンドがある。それにちなんで陽気な若者達であれ、とのことでした。

このいただいたバンド名を部の皆に披露すると、”ナニ?ロス・ガラクタス?ロス・ガラガス?とかいわれて不評でしたが、ま、いいかということでバンド名が決まりました。

これで私のたぐらみがうまくいったかに思えたのですが、こんな楽器編成ではまともなアンサンブルになることなく、私の代は終わりました。しかし、志賀高原での夏の合宿では皆それぞれの魅力ある人柄に触れ合うことができ、いい思い出となりました。というのも合宿とは名ばかり、ほとんどがマージャンとハイキングで、そのほんの合間にちょっと練習しただけですから。だから演奏会も友人知人のサクラをかき集め、演奏ミスをしては自発的アンコールの繰り返しをするといった、今ではホロ苦くも楽しい思い出となっております。

今、ロス・ガラチェロスは私のたぐらみをはるかに越えて、メジャーでハイレベルになっているようで、創部者と名乗るのがおこがましいのではないかと複雑な気持ちです。しかし私はその後も相変わらず音楽が好きで、というか、音楽を心の糧として生きてきました。私の設計作品のテーマも聴覚の視覚化、建築の音楽化といったところです。そういえばノーベル賞物理学者リチャード・ファインマンもボンゴやコンガを叩いては時間空間を考えていたそうですね。

とにかく音楽は一生の心の糧であり、心の友であります。しかし長い間この音楽とつき合っていると興味とするところが変わっていくことがあります。私は目下のところ、J. S. バッハ達のポリフォニー音楽が好きです。ポリフォニー、すなわち対位法というのは、複数の旋律がそれぞれ独立・対立しながら、動的に多様に絡み合い・重なり合いながら同時に進行していく音楽構成法です。そういえばラテン音楽もトランペットやアルトサクソが旋律をうねらせる中、テナーサクソやリードギターがスタッカート旋律を差し込み、打楽器群がその時間軸を分割して刻んでい

く・・・。そう、ラテン音楽もポリフォニー音楽の一つだったのですね。今思えば、私はそのへんのところ的魅力を感じていたんですね。したがって私が時が経つにつれ、それらの音の構造・構成がより複雑で巧妙なものへと、それらの音が表すところのものが具象的なものからより抽象的なものへと求めていって、たどり着いたのがJ. S. バッハだったとすれば、それは実に自然の流れだったといえましょう。

そこで、私の時代よりはるかにハイレベルの現役部員に私が期待し提案するのは、私のたどった流れを短縮して、J. S. バッハの曲をラテン音楽に編曲してラテン楽器で演奏してみてもどうかということです。J. S. バッハの曲は音の構造・構成に価値があります。したがってバッハの曲は楽器の音色に隷属することがなく、どんな楽器でやってもどんなジャンルのスタイルでやってもバッハの魅力は損なわれることはありません。むしろ新たな魅力として蘇ります。これまでにジャズでも、スカットでも、ロックでも演じられてはバッハの新たな魅力が引き出され、それぞれのジャンルに新たな魅力が付加されてきました。

よろしくご検討下さい。

部員の皆様がますます御活躍されることをお祈りいたします。

1996年7月20日

’66年建築学科卒
篠崎 好明

現役活動報告

はじめまして、こんにちは。私は今年度マネージャーの佐藤と申します。「かんち」という名前でご存知の方もいらっしゃると思います。

毎年4月ともなりますと、多くの新入生が部室を訪れ、岩井海岸にて行われた恒例の春合宿には25名が参加しました。最終日には多くのOB・OGの方にご参加頂き、ありがとうございます。7月現在、しがみついているC年約10名を含め、総勢約40名で活動しております。

5月25日(土)には、L・S・B・C Big Band 4コンサートが行われました。今年は日本工業大学で不祥事があったため、3大学のみ参加とな

り、恒例の新宿・大黒屋での打ち上げも自粛することになり、残念でした。来年こそは、4大学でがんばってもらいたいものです。

6月29日(土)は、代々木公園野外ステージにて、5大+1もっと仲良しコンサートを行いました。梅雨の合間ながら、晴天に恵まれ、気持ちよく演奏できたのは、嬉しいことです。

現在は、8月17日(土)の山野 Big Band Jazz Contestに向けて練習しています。前期の山場なので、部員一同がんばっています。

今後の活動予定を簡単にお知らせします。

・8/6(火)～13(火) 夏合宿

今年はグリーンシャトーみやざわがおさえられなかったので、嬌恋村のプチホテルマルシェにて行います。もし気がむいたら、お立ち寄り下さい。

・8/17(土)・18(日) 山野 Big Band Jazz Contest

日本青年館で行われます。ロスガラの出番は、1日目の5番目で、12時すぎからです。応援よろしくお願い致します。チケットは部室にて、1000円で販売しております。

・10/12(土)・13(日) 工大祭

残念ながら、屋台の場所取りに失敗しました。ジャズ喫茶のみとなってしまいました。ぜひ、いらして下さい。

・12/21(土) 第30回定期演奏会
今年もとびます。

これからもロスガラ部員一同がんばっていきましょう！と思っております。暖かい目で見守ってください。



力作！海外支部活動報告

ライブインプレッション

～ウィーンのジャズフェスティバルを中心に

森丸直樹('82年入学)

6月より3カ月の予定でオーストリアはウィーンに来ています。ウィーンから現地レポートをロスガラメーリングリストに投稿していますが、その中からこちらでのジャズライブに関連したものを中心に抜粋、編集してみました。文中「我々」とあるのは、私と女房のことです。

6月11日(ロスガラメーリングリスト投稿記事、No. 36740より)

ウィーンに来て市内のあちこちで“Jazz Fest Wien”というポスターを目にしました。ウィーンでジャズフェスティバルがあるみたいです。さっそくツーリストインフォメーションに行きプログラムをもらってきました。2週間以上に渡って6会場で、のべ30近いステージプログラムが組まれています。

ウィーンはオペラやクラシックのコンサートで有名ですが、国立オペラ座や、オペレッタを中心に上演しているフォルクスオパー、ウィーンフィルの本拠地である楽友協会ホールといった、著名なホールの定期プログラムは6月いっぱい終了し、7、8月は夏休みに入ります。定期プログラムが休みの間、これらのホールでは何をやるんだろうと思ってたら、こんなことやっています。

モントルーやノースシージャズフェスの目玉はそのままこちらにも来るようです。オペラ座でブレッカーやショーターを聞いてみるのも一興。モントルーやデン・ハーグにわざわざ行くこともないような気がしてきました。

6月28日(No. 37126)

ステファン・グラッペリ・トリオのコンサートに行ってきました。

ホールはウィーンフィルの本拠地で知られる楽友協会の大ホール(黄金ホール)です。我々が手に入れたのは、450AS(オーストリア・シリング、約4,500円)の席。平土間(アリーナ)席の24列目です。

実は動くグラッペリを見るのは初めてでした。ベース、ギターに続いて、車椅子に乗ったグラッペリが登場。1時間半に渡るコンサートで、途中でギター、ベースそれぞれのフィチャー曲を交えて、20曲はやったと思います。途中でソロピアノも1曲披露していました。

当日配られたメモによれば、1908年生まれだそうです。当年88歳ということになります。ピアノはおふざけとしても、バイオリンの音はほとんど衰えを感じさせないものだったように思います。あっという間の1時間半でした。

終了後はアンコールに応じて1曲やりました(曲は失念した)。その後もスタディングオーバーションがしばらくやみませんでした。ウィーンでのグラッペリの人気もなかなかのようです。

7月1日(No. 37198)

この週末二泊三日でブラハに行ってきました。最後の夜に偶然見つけたJAZZ CLUBに行ってみました。表にはバンド名(失念)が書いてあって、20年代のJAZZをやるような説明書きがありました。案の定、バリバリのディキシーランドスタイルのバンドでした。Tp, Tb, Ts(Cl), Tuba, Ds(BD, SDにシンバル2枚のみのセッティング!)、G(バンジョー持ちかえ)という編成に、何曲かボーカルのおねーさんが入るというスタイル。“Chicago”とかやってみました。意外にバンドメンバーも客層も年齢がととも若いです。バンドの平均年齢は30歳位でしょうか。ブラハではディキシーランドジャズが人気なのかもしれません。路上でもよくディキシーランドジャズのストリート演奏を見かけました。ミュージックチャージ50Kc(チェコ・コルナ、約200円)、ビール一杯19Kc(約80円)。

7月8日(No. 37384)

ウィーンで開催中のジャズフェスティバル、Jazz Fest Wienの第一段として、Paquito D'Riveraのステージを見てきました。

場所はKammeroperという座席数300くらいの小さな劇場でした。我々の席は最前列中央です。operという名前だからオペラを上演している劇場だと思うんですが、何故かオーケストラピットがなくて、最前列席の目の前にステージの崖っぷ

ちが迫っています。座席に座って足を伸ばすとステージの崖に届きます。久しぶりのステージかぶりつきです。コンサートチケット290AS(約2,900円)。

パキートの前に地元ウィーンのバンドが出てきました。AS, G, B, Dsのカルテット、平均年齢30くらいの若いバンドでした。ボブ・バーグとマイク・スターンのグループでボブ・バーグがアルトを吹いたらこんな音かなといったスタイル。オリジナルをやってるようです。メンバー4人ともバカテク、なかなかいい音してました。ウィーンのジャズ、あなどれません。

前座が終ってステージ入れ換えの休憩が30分ほど。いよいよパキートのステージです。ステージは「カリビアン・プロジェクト」と称して、同名の最新アルバムからの曲が中心でした。パキート・デリヴェラ(AS, SS, CI)、デイブ・サミュエルズ(Vib, Marimba)、アンディー・ナレル(Steel Pan)、ピアノ、ベースは名前を失念、イグナシオ・ペロア(Ds)という構成。久しぶりのサンバはゴキゲンでした。会場のノリもなかなか良かったと思います。なぜかパキートは頭を丸刈りにしてました。

ステージかぶりつきで首が疲れました。小さな劇場だったので、ステージが本当に手に届くくらい近いところにありました。演奏中にサミュエルズが鼻をすする音が聞こえました。彼は風邪をひいていたようです。

7月10日(No. 37448)

Jazz Fest Wien第二段のレポートです。

昨日は国立オペラ座に行ってきました。出演は、Michel Petruccianiのカルテットと、McCoy Tyner Trio & Michael Breckerの予定でした。

座席は平土間(アリーナ)の5列目です。オペラやってる時は、ステージと客席の間にオーケストラピットがありますが、このオーケストラピットのあった場所にステージができてました。先日のパキートのステージも、オペラやる時はオーケストラピットになってるのかも知れません。コンサートチケット500AS(約5,000円)。

この組合せなら、当然ペトルチアーニが先に

やるんだろうと思ってました。彼って生で見たことなかったもので、楽しみ楽しみ。わくわくしてたんですが、開演時間になってドイツ語でなんかアナウンスされて、モンティ・アレキサンダーとかいう人のグループが出てきました。この後のステージ入れ換えの休憩の時に入口ロビーに出てみると、なんか張り紙がありました。ドイツ語のみだったので正確なことは分かりませんが、誰かが病気のためプログラムが変更になったみたいです。すっかりだまされました。

モンティ・アレキサンダーって名前は聞いたことがあるような気がするけど、ジャマイカ出身なんでしょうか?前編レゲエビートでかったるい音楽やってました。けっこう客席には受けてたみたいですが、つまらんかった。

気をとり直して、次はいよいよ本命のマッコイとブレッカーです。途中トリオとマッコイのソロを1曲ずつはさんで、早い4ビート中心に7曲くらい演ったでしょうか。2時間近いステージでした。マッコイは相変わらずリズム完璧、ガンガン弾きまくりで、ブレッカーのぶりぶり、ごりごり、うねうねの連続、盛り上がります。

モンティなんかの時にはぜんぜん気にならなかつたんですが、国立オペラ座の音響って残響がすごくて、早い4ビートやると音が回ってばやけて面くらいます。プレイヤーも演りにくいんじゃないかなあ。まあ聞いてるとそのうち慣れてくるんですが。逆に、ブレイクで音が消えるアレンジなんかやると、残響がカッコいい。背筋が震えます。

アンコール1曲終って多くの客が帰りかけたんですが、4、5階の上の方の席からの歓声と拍手に客席全体があおられて、いったん席を立った人も多くが残ったままでスタンディングオベーション。しばらくしたら、マッコイとブレッカーの2人だけが出てきて、デュオでバラードやりました。素晴らしいステージでした。

7月11日(No. 37464)

Jazz Fest Wien最後のレポートです。

昨日も国立オペラ座に行ってきました。国立オペラ座でのプログラムとしては最終日になります。Wayne Shorter GroupとZawinul Syndicateのステージです。今日の席もアリーナの5列め。

ほぼ中央の席です。コンサートチケット500AS (約5,000円)。

ショーターのステージの完成度は非常に高かったと思います。最近のショーターの音をフォローしてなかったんで勉強不足でしたが、結構エレクトリック色が強い作りで私のショーターに対するイメージと違ったステージでした。

最後はジョー・ザビナルのグループ。彼のバンドは斑尾に来た時に聞いたことがあるはずですが、あんどきゃ、例によって酔っ払って寝たのか全然印象に残ってませんでした。今回、間近に彼らの演奏を見ましたが、ちゃんと見るとやっばりすごい。

彼の音楽の独特の色彩というか、民族色は東欧のものなんですね。民族色あふれるステージでした。ドラマーが演ずるアフリカの民族楽器(名前を失念)と歌をフィーチャーしてザビナルとデュオやったり。

ザビナルは地元出身だけあって、MCも全部ドイツ語でやって、歌もドイツ語で歌ってけっこう受けを取ってました。おかげで、じえんじえん分からん。そういえば、昨日よりも客の年齢層が若干高いような来もしましたが、小学生くらいの子供連れてきてる人もいました。彼はウィーンでは人気者のようです。アンコール終ると、スタンディングオベーションの中でたくさんの方がステージ前に詰めかけてました。

ライブインプレッションを文章にするのは難しいですね。これくらいで終りにします。

(筆者注) この後のロングアイランド沖でのTWAの航空機事故で、ショーターの奥さんが亡くなったそうです。以降の彼のバンドのヨーロッパツアーはキャンセルされたと聞きました。彼の心中を察すると同時に、奥さんの御冥福を祈ります。

特報！

大好評連載漫画『ロスガラ君』は作者退院中の為、今回はお休みさせていただきます。

予告どおり帰ってきた

「嗚呼！ロスガラの妻たち…」

読者アンケートでも絶大な人気を誇る当コラム、前回の休みもなんのその、帰ってきました。

今回はロスガラ相模原支部で「リーダー」と慕われ、ハニーこと小林有一('89年入学)の入社後見人でもある、藤縄('79年入学)氏が結婚されたということで、さっそく奥様に執筆をお願いしました。

藤縄俊之の妻 明美の場合

残暑お見舞申し上げます。

皆様、今年4月はれて“ロスガラの妻達”の仲間入りをさせて頂きました、藤縄明美です。ロスガラの皆様には4月の私達披露宴での全編にわたるすばらしい演奏に始まり、5月には水元公園でのBBQ&涙のケーキカット、6月ロスガラ相模原支部主催町田カンボジャ料理店で楽しむ、等々、新参者の私を暖かく迎えて下さり、ありがとうございました。

正直申しますと、ロスガラ系(ラテンとかビッグバンドとか、それらをまとめて私の持つイメージをロスガラ系と呼ばせて頂きます)には過去全くご縁のなかった私だったのですが、今や、その影響力は計り知れず、確実に私の人生の中に浸透しつつあるようです。

それもこれも、フジナワさんとのご縁あっての事と、感慨もひとしおです。そのフジナワさんですが、同じ職場で、かつ同じ社食でお昼ごはんも食べ...(考えると3食同じカマのメシ状態です...これって...)、社内ではお互い「フジナワさん」「カトウさん」(会社では旧姓を守っております)と呼びあうクールな仲ですが、一步お家の玄関を入ると私は“ダーリン”と呼んでます(勝手にしろ!)。時に社内の間違って使うのではないかと心配して社内では極力顔を合わせないようにしている毎日です。

さて、まだまだ暑い日が続きますが、皆様、相模原方面にご用の有る方も無い方も、是非フジナワ家に遊びにいらして下さい。当家では、唯一きれいに片付けられている和室に^{つくばい}蹲踞(祝結婚!ロスガラ相模原支部寄贈)がしつらえられ、鹿おどしの音も高らかに、皆様のお越しをお待ち致しております。

東京ガラチヨス on 新宿J

誌上再現ライブ

土屋 正春('77年入学)

高梨伸彰氏(S52年入学 Tb)を中心に、ロスガラOBを取り揃えたバンドが今年3月に結成された。バンド名として「東京ガラチヨス」を名乗るこのバンドが、新宿のジャズライブハウス「J」にて、1996年6月29日(土)22:15から初のライブを行ってしまった。その興奮のステージの模様を、当日演奏された曲名とMCの内容から、あいまいな記憶にたよりながら再現する。

1曲目 Too Mavelous (Fast Bebop)

「こんばんは。どうも、東京ガラチヨスです。1曲目はちょっとヒヤヒヤしましたが、一応無事に終わりましたね。よかったですねえ。ということで、次はカウントベイシーのナンバーから、オレンジシャーベットを。」

会場から『いいぞっ! しっかりやれ!』の声あり。

2曲目 Orange Sharbet (Medium Swing)

「さて、今晚のステージは3部構成になっていまして。先ほどの慶応大学のKMPのOBバンドの皆さんに引き続きまして、私たちがサードステージを勤めさせていただくことになってるんですが、実はこのわたしたちのステージも3部構成になってます。最初は、4ビート系で、途中でちょっとあって、最後はおにぎやかにという感じでしょうか。で、早いもので、もう、第1部最後の曲になってしまいました。アルトサクスの久保悟志をフィーチャーしておおくりします。」

3曲目 Soft as Belvet (Ballad)

「えー、では休憩も無く、盛り上がり第2部の方に突入して行きたいと思います。ここで、わたしたち東京ガラチヨスの専属ボーカリストを紹介したいと思います。」

(女性ボーカリストの登場を期待して会場盛り上がる。)

「それでは、御紹介しましょう。マイケル菅野!!」

4曲目 Cicago (by"シカゴ")

5曲目 Fly me to the Moon (Medium Swing)
(マイケル菅野のスキヤットに場内騒然となり陶酔する。ほんと。)

「では興奮もさめやらぬまま、引き続き第3部のほうに移りたいと思いますが、3部の最初の曲は、トロンボーンセクションをフィーチャーしたこの曲です。」

6曲目 HIP BONE (Fast Swing)

「いやあ、はらはらしますねえ。これからも何が起こるかわからないですから、手に汗握って楽しんでいただければと思います。では、次の曲ですが、これが曲自体が3部構成になっているという長い曲です。トランペットの沢村宏をフィーチャーしておおくりします。」

7曲目 Doc's Holiday (8-beat>Jazz Waltz>Samba)

「つぎで、最後の曲になりますが、ここでちょっとパーカッションを準備させていただいて、サルサの曲をやろうかと。曲はカウントベイシー・オーケストラのコーナーポケットですが、それを無理矢理サルサのリズムでやってしまうというものです。準備ができたようなので、コーナーポケット、サルサ版です。」

8曲目 Corner Pocket (Salsa)

「今日は、みなさんの暖かいご声援で、なんとか最後までできました。本当にありがとうございました。」

会場内アンコールの拍手が続くが、レパトリーを出し尽くしてしまったこともあり、そのまま終わる。

編集後記

会報は会員の方々の投稿で紙面を構成しているわけですが、今回はいつもに増して力作ぞろい。どうもありがとうございました。

さあ、来るOB同窓会に向けて、気分を盛り上げて行きましょう!

OB会報ならびにOB会活動全般についてのお問い合わせは、幹事の國枝までお願いします。



急告！

LGOB同窓会開催

酷暑の候いかがお過ごしでしょうか。

さて過日、一部OBの皆様にはお知らせいたしましたが、本年10月12日（土）、母校百年記念館で、ロスグアラチェロスOB同窓会の開催を、企画いたしております。

本年は、OB会創設いらい四半世紀の、記念すべき年にあたり、また当日は工大祭の初日でもあります。

現役諸君の活躍を参観がてら、母校を再訪し、旧交を温める真に良い機会と存じます。同期の皆様お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

開催要項

日時及び場所 : 平成8年10月12日（土）
受付開始 : 午後3時30分より 於 母校百年記念館第一会議室
懇親パーティ : 午後5時30分より 於 同上フェライト記念会議室
会費（予定） : OB会員9千円、ご同伴大人6千円、17才以下2千円、6才以下無料

なお、百年記念館の一般予約開始が2ヶ月前からのため使用確定できておりません。あいにく当日フェライト記念会議室が学内行事で5時まで使用予定となっておりますが、同期による2次会を企画されている方々のため、パーティ開始時刻を多少早めるべく折衝いたしております。

これらが確定でき次第、正式なご案内を発送いたしますので宜しくお願いいたします。

ロス・グアラチェロスOB同窓会実行委員会 委員長

榎本 航二（S36年）

同OB会長

土屋 正春（S52年）

なお本件に関するご問い合わせ、ご提案などは下記宛まで。

実行委員会事務局長

勝亦 研二（S39年）